

32図 御所ヶ谷城 (S=1/12000)

第178図 古代山城と城壁断面の模式図2  
(再トレース、一部改変)

## 6. まとめ

鬼ノ城では昭和53年の調査以来、防御正面である南東側の城壁に較べて、背面側に位置する城壁については、城壁の有無や規模の面でも低調な印象がもたれていたように思われる。

調査の進展に従い版築土塁が明らかとなり、土塁内には内側柱穴を検出し、内外の敷石等についてもトレンチの範囲内で検出しており、何ら遜色のない構造である事が確認できた。また、鬼ノ城の北東部においては峻険な自然地形を城壁として巧みに取り入れた結果、城壁のバリエーションが豊富になっており、

単に城壁の省略という評価は肯首できない。

今後は狭小な尾根を城壁と見立てて利用・加工していた痕跡や、版築盛土用に発生した大量の土砂と供給の実態を探るため、城壁線の周辺に展開していると考えられる削平地や、土取場との関係なども観察していく必要がある。

註1 A版築層の壁面は角楼の突出部を築造する際に、多少整形した可能性もあるが、他のトレンチの状況をみてもさほど変化は認めがたい。

註2 城壁上面の形状については鬼城山整備委員会でも度々議論となっている。まず、第3 壘状区間の石垣部分では石垣の天端と、内側列石の上端を結べば城外側へ傾斜するため、現況の傾斜を尊重する意見と、いま一つは城壁上面を流下する水処理の関係から城内側へ傾斜し、内側敷石の勾配も一連の形状を反映しているという考え方である。問題解決にはさらに検討が必要なため、ここでは水平表示とした。

城壁断面集成図1、2では表土や流土層を図化せず、版築層のみを表示した。

註3 地山の斜面における段は自然地形による段(15図)と、人為的に削平した段(8図)が存在し、7図の地山には足場を形成した程度の小段も認められる。

註4 葛原克人「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』、新人物往来社、1994年

註5 『佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書』-1990・1991年-、佐賀市教育委員会、平成8年  
『帯隈山神籠石』佐賀市教育委員会、1967年

註6 『杷木神籠石』杷木町文化財調査報告書第1集、杷木町教育委員会、昭和45年

段切りを施さない27図のような形状は鬼ノ城でも認められ、例えば4図の事例では地山が岩盤のため、段切りを施すのに技術的な困難を伴ったからと理解している。

註7 『永納山城遺跡調査報告書』東予市教育委員会、昭和55年

史跡整備事業に伴う永納山城の確認調査が平成14年から実施され、城壁線の確認調査では段切りを施し、列石と裏込石が配置されている箇所があった。また、場所にもよるが尾根線を巧みに取り込み城壁としており、版築盛土と尾根頂部が平坦な関係も今後注目したい。現地では渡邊芳貴氏にご教示いただいた。

註8 小川秀樹「豊前・御所ヶ谷神籠石」『古代文化』第47巻12号、1995年

『城壁における版築技法の比較検討』古代山城研究会、1999年  
小川秀樹氏に最新の調査成果と所見をご教示いただいた。

註9 古代山城と城壁断面の模式図1、2では、平面・断面とも各報文から再トレースし一部改変しており、模式図として御覧頂きたい。

## 参考文献

『古代の土木技術』大阪府立狭山池博物館、平成13年

\*地下構造の事例では大廻小廻山城では列石が版築盛土により被覆されているが、城壁の前端から地山整形痕までに一定の幅が認められる事や、鹿毛馬城においても列石背後に同類の整形痕が認められる。ただし、底部幅が狭く列石掘形との区別が付かない事例もあり、構造的な意味付けが必要である。筆者が最近実見した事例では大野城の屯水石垣や、小石垣の基底が一部露出しており岩盤直上から石塁が築造されていた事から、城壁構築前に岩盤の露出、清掃、もしくは削平も含めた行為を改めて実感した。

## 第4節 出土遺物について

西日本に分布する古代山城は、近年城壁線や城内施設の発掘調査が増加している事により、徐々にその様相が明らかになりつつある。しかし当該期の出土遺物には恵まれているとは言えず、各山城の築城期、存続期、廃絶期の解明にはなお時間がかかるであろう。

鬼ノ城では平成6年度の東門から発掘調査が開始され、平成15年度まで9年を経過するが、この間に出土土器はコンテナ箱にして約12箱分が出土している。出土地点は城門を始めとする城壁線を中心に広範囲に及んでいるが、これらの遺構は本来生活痕跡の形成が乏しい場所でもあり、必然的に出土量が少ないと考えられる。従って個々の出土状況を検討しても一括遺物等の良好な資料には恵まれていないのが現状である。

今回整理した遺物は、総社市教育委員会が平成8年～平成15年度にかけて実施した発掘調査の際、出土したものであり、古代山城期と考えられる遺物を総合的に取り上げ、土器組成を整理した後に、時期的な傾向を述べて見たい。

土器組成の基本として供膳具・貯蔵具は須恵器、煮沸具は土師器で構成され、供膳具の土師器は今のところ出土していない。そのため出土点数の多い須恵器を中心に上げる事にしたい。

供膳具は坏B、椀形坏、高坏、皿があり坏が主体である。杯Bの蓋には内面にかえりが付く器形と無い器形の2形式があり、平成11年度の城内確認調査においてもかえり付きの坏蓋が出土している<sup>(1)</sup>。焼成は13点中、6点が不良品であり、現段階では法量分化もさほど進展していない印象を受ける。他の器形では椀形坏、高杯、皿が出土しているものの極めて少ない。

貯蔵具は甕、壺、鍋、平瓶、横瓶があり、主体として甕と壺が挙げられる。甕は出土地点での同一片を省いて集計しているが、さらに差し引いたとしても圧倒的に多い傾向は変わらないであろう。また、焼成をみると68点中、17点が不良品であった。

壺は壺Kと考えられる器形が6点あり、他には短頸壺や直口壺など比較的バラエティーに富んでいる。また甕に比べ焼成が良好であることも特徴である。他の器形では鍋、平瓶、横瓶が出土しているがこれらは量的に少ない。

文房具は南門より城内側に位置する大形土壙から圈足硯が出土している。南門から至近距離で出土していることもあり、城門で使用されたと言う仮説が許されるならば、人員や物資を掌握する城門の管理機能を示唆するのかもしれない。この圈足硯は備中<sup>(2)</sup>でも大型の部類に入り、今のところ類似形態は認められない。

他の古代山城の類例を見ると鞠智城の城内に所在する池跡取水口から圈足硯が出土しており<sup>(3)</sup>、播磨城山城でも石塁<sup>(4)</sup>の近辺で坏B蓋の転用硯が採集されている。断片的な資料ではあるが古代山城の人員構成に識字層を取り込み、城の運営が実施された事は想像に難しくなく、今後の調査の進展に従い陶硯と文字資料は増加するものと期待される。

以上の検討から土器組成は坏B、壺、甕が主体となる傾向が認められ、城壁線付近ではこれらの器形が重用されたものと考えられる。こうした状況は鬼ノ城のみの現象だけではなく、近年発掘調査が進展している金田城や大廻小廻山城から出土した遺物の検討からも、城壁線における貯蔵具の出土が注意されている<sup>(5)</sup>。

また、須恵器自体の観察では坏Bや甕に焼成不良品を含むことは前述したとおりであり、胎土も砂粒を多く含むなど備中では通有の須恵器が大半と認識される。しかし、一方で焼成が良好で、精良な胎土を持ち、製作技術の上でも精緻な須恵器が少量ながら出土しており、再整理の際、第179図の坏B、平瓶、長頸壺（壺K）、壺を抽出した。これらの遺物は厳密には胎土分析を経て断定すべきであるが、備前産の須恵器である可能性が高い<sup>(6)</sup>。

限定的な資料の中で、土器様相を端的に示す器形は坏と壺が挙げられる。坏類は坏Hが今のところ出土しておらず、坏Gも城内の確認調査の際にわずかに出土しているにすぎない。坏類はやはり坏Bが主体となっていると言えよう。

また、かえり付きの坏B蓋に注目すると鬼ノ城以外でも基肄城（665年築城）の礎石建物や、鞠智城（698年修築）の池跡、59号建物、64号建物<sup>(8)</sup>などから出土しており、金田城（667年築城）のピング

表13 各器形と出土点数

| 供 膳 具 |     |      |   | 貯 蔵 具 |    |    |   |    | 文房具 |
|-------|-----|------|---|-------|----|----|---|----|-----|
| 坏B    | 碗形坏 | 小型高坏 | 皿 | 甕     | 壺  | 平瓶 | 鍋 | 横瓶 | 円面硯 |
| 13    | 2   | 2    | 1 | 68    | 14 | 2  | 1 | 1  | 1   |

※単体の出土で、小片のものは集計していない。

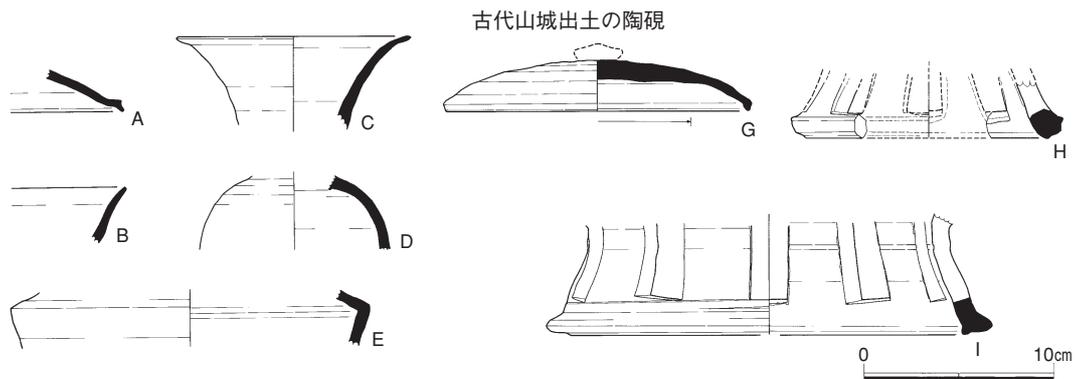


表14 備前産須恵器と各山城の陶硯

| No. | 出土地            | 備考         |
|-----|----------------|------------|
| A   | 鬼ノ城溜井上方        | 『年報』11、P95 |
| B   | 鬼ノ城第1水門        | 本稿         |
| C   | 鬼ノ城南門T 8、東側石垣  | 『年報』8、P82  |
| D   | 鬼ノ城第8 壘状区間     | 初出         |
| E   | 鬼ノ城第95壘状区間尾部付近 | 本稿         |
| F   | 鬼ノ城第0水門の城内側    | 『年報』8、P84  |
| G   | 兵庫県城山城出土       |            |
| H   | 熊本県鞠智城出土       |            |
| I   | 鬼ノ城南門の城内側土壌    | 『年報』8、P82  |

第179図 備前産須恵器と陶硯 (S=1/4)

※『総社市埋蔵文化財調査年報』→『年報』

シ山南斜面からも検出されている<sup>(9)</sup>。各山城からの出土遺物が少ない現状においては、この坏蓋は時期的に限定できる器形でもあり、山城存続期における年代的な位置関係を知る上で、一つの指標となるであろう。

壺Kは肩部に櫛描文を施した器形がわずかに認められるが、これに較べて肩部と体部との境に明瞭な稜を持ち、形式的に後出する器形が多く確認できる事も注意される。

以上の検討から都城の編年観に従えば、藤原宮SD1901Aと下ツ道西側溝SD1900Aを標識とする飛鳥Ⅳ期、飛鳥Ⅴ期に比定する事が妥当と考えられる<sup>(11)</sup>。また、難波地域の編年研究の成果からは坏Hがほとんど見られなくなり、坏A・Bが主体となる難波Ⅳ期に相当すると理解している<sup>(12)</sup>。

しかしながら、飛鳥地域等の先進地域と地方を比較した場合、宮都の特殊性による型式変化の進行度や、最新型式を受容し普及する際に生じる時間差、もしくは器形を受容する程度についても差異が認められ、各遺跡から検出された遺物の実状に即した編年の見直しが提言されて久しい<sup>(13)</sup>。

こうした観点に立てば、備中の当該期における定点となる遺跡は三須河原遺跡が挙げられる。『三須河原遺跡』の報文によればⅠ期の標識となるSK03の遺物は須恵器坏B蓋、非在地産土師器の坏A等による一括性が高い資料とされている。そればかりか須恵器坏Bの底部には「郡殿」銘の墨書土器が共判しており、畿内産土師器との併行関係や、「郡」名表記等を根拠に飛鳥Ⅴ期に比定されている。在地の土器編年の研究成果に導かれるならば鬼ノ城出土の坏Bや、椀形杯の形状からみても飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に併行することは肯首できよう<sup>(14)</sup>。ただし、今回の検討範囲外ではかえり付きの坏B蓋や、坏身、平瓶等においても飛鳥Ⅳ期の中でも古相を示す遺物が出土していることも事実で、この問題は城内の確認調査の成果や資料の増加を待つて検討したい。

註1 平成11年度は岡山県古代吉備文化財センターが城内の確認調査を実施しており、出土遺物は岡田博氏の御厚意により実見、実測させて頂いている。今回は検討を控えており、報告書の刊行を待つて再考したい。

註2 松尾洋平「備前・備中の古代陶硯－円面硯を中心に－」『古事』天理大学考古学研究室紀要第6冊、2002年

註3 熊本県文化財調査報告第181集『鞠智城』第20次調査報告、熊本県教育委員会、1999年  
圈足硯は鞠智城において実見した。

註4 加藤史郎「播磨・城山」『古代文化』第47巻第11号、平成7年  
城山城の出土遺物は新宮町教育委員会 義則敏彦氏の御厚意により実見、実測させて頂いた。

註5 岡山市文化政策課 乗岡 実氏の御厚意により大廻小廻山城の遺物を実測、実見させて頂いた。金田城の遺物は美津島町教育委員会 田中淳也氏に御教示頂いた。  
『大廻小廻山城跡発掘調査報告書』、岡山市教育委員会、1989年

註6 武田恭彰氏の御指摘を受け認識を深め、次の資料を一部実見、実測させて頂いた。長船町桂山十二ヶ札5号墳、西谷遺跡。備中では吉備路郷土館にて二子御堂奥窯の資料を実見した。

註7 向井一雄「古代山城研究の動向と課題」『溝渡』第9・10号、古代山城研究会、2001年

註8 熊本県文化財調査報告第169集『鞠智城』第19次調査報告、熊本県教育委員会、1998年

註9 美津島町文化財報告書第9集『金田跡跡』、美津島町教育委員会、2000年

註10 『鬼ノ城』、鬼ノ城学術調査委員会、昭和55年  
金田明大「宮都出土須恵器の製作技法」『第6回シンポジウム古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6－須恵器の製作技法とその転換－』古代の土器研究会、2001年

註11 『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会、1992年

註12 『難波官址の研究』第十一、(財)大阪市文化財協会、2000年

註13 小森俊寛「基調報告」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5－ 7世紀の土器』古代の土器研究会、1997年

註14 『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16 三須地区県営農業基盤整備事業に伴う発掘調査、総社市教育委員会、2003年

## 報 告 書 抄 録

| ふりがな                               | こだいさんじょう きのじょう                                |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
|------------------------------------|---|--------|------------------------|-------------------|--------------------|---|--|------------------------|
| 書名                                 | 古代山城 鬼ノ城                                      |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| 副書名                                | 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査                              |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| 巻次                                 |   |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| シリーズ名                              | 総社市埋蔵文化財発掘調査報告                                |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| シリーズ番号                             | 18  |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| 編著者名                               | 村上幸雄・松尾洋平                                     |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| 編集機関                               | 総社市教育委員会                                      |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| 所在地                                | 〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL0866-92-8363     |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| 発行機関                               | 総社市教育委員会                                      |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| 発行所在地                              | 〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL0866-92-8363     |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| 発行年月日                              | 西暦2005年1月18日                                  |        |                        |                   |                    |   |  |                        |
| ふりがな<br>所収遺跡名                      | ふりがな<br>所在地                                   | コード    |                        | 北緯                | 東経                 | 調査期間  | 調査面積   | 調査原因                   |
|                                    |   | 市町村    | 遺跡番号                   |                   |                    |   |  |                        |
| くにしていせき<br>国指定史跡<br>きのじょうざん<br>鬼城山 | おかやまけん<br>岡山県<br>そうじゃし<br>総社市<br>おくさか<br>奥坂ほか | 33-208 |                        | 34°<br>43′<br>26″ | 133°<br>45′<br>58″ | 平成13年<br>度～平成<br>15年度                             | H13,<br>3000㎡<br>H14,<br>1260㎡<br>H15,<br>800㎡ | 史跡整備に伴<br>う事前の発掘<br>調査 |
| 所収遺跡名                              | 種別  | 主な時代   | 主な遺構                   | 主な遺物              |                    | 特記事項  |  |                        |
| 鬼城山                                | 古代山城  | 古代     | 西門<br>角楼<br>版築土塁<br>石垣 | 須恵器<br>土師器        |                    | 城壁線を中心とした発掘調査によ<br>り、版築土塁、石垣を始め角楼、<br>西門の全容が判明した。 |  |                        |

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 18

## 古代山城 鬼ノ城

鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査

2005年1月14日 印刷

2005年1月18日 発行

編集発行 総社市教育委員会  
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社  
総社市総社一丁目10番24号